

## 【資 料】

## 2015年における酪農学園大学野生動物医学センター WAMCの活動報告(2)

浅 川 満 彦

(酪農学園大学獣医学群獣医学類 感染・病理学分野 獣医寄生虫病学ユニット)

### 教育および啓発活動

#### 1. 教育

学術交流協定にあるベトナム・ハノイ農大のDuong Duc Hieu 講師（通称ヒューさん）は、野生動物医学に基盤を置いた寄生蠕虫類の疫学研究に加え、寄生虫病診断に分子生物学的な手法を取り入れたいとの希望であった。よって、後者の分野は放射線獣医学の遠藤大二教授にお願いし、その研修のご指導をして頂いた。多くの成果を得られ、10月18日、約3カ月の滞在期間を終え帰国した。彼は29歳と若い精力的な研究者であり、優位な人材として母国のために活躍するであろう。

#### 2. 啓発活動

今年のWAMC入退館記録によると延べ546名と、例年にない多くの利用者が読み取れた。第21回日本野生動物医学学会大会の準備と大会当日での出入りがそのおもな要因であった。この大会であるが、国際野生動物管理学会議IWMC2015が札幌で開催されること、この国際学会事務局が本学・循環農学群に置かれたこと、野生動物医学学会大会をこのIWMCと連結開催させることから、親学会理事の著者が運営することになった。著者がこの大会を運営するのは、1998年の第4回大会に次いで2度目で、前大会では大会長を旭山市旭山動物園の小菅正夫園長（当時）にご就任頂いた。日本野生動物医学学会は動物園・水族館（園館）が主役だからで、今回も旭山動物園の坂東 元 園長に大会長になって頂いた。野生動物医学学会大会の開催初日はIWMC2015最終日に合わせ、開催期間は7月30日～8月2日とした。しかし、この日程は園館繁忙期と大学前期試験とが重なった。この学会は学生部会のパワーに依拠しているが、このような日程では気の毒としか言いようがない。だが、一般演題67題に加え、シンポジウム・自由集会などで盛会に終わった[27, 28]。学生部会の本学支部の諸君はWAMCを拠点に、野幌森林公園のエクスカッションを行った。また、

国立科学博物館が主催した自由集会「ストランディング 個体に関する実習」は、WAMCの入院/サンプリング室内で行われた。WAMCの存在感を参加者の多くに示すことができた。

このようにして大きなイベントが終わったが、休む暇もなく、多忙な状況が続くことになった。今年から、日本野生動物学会（北日本支部長 兼 事務局長）、日本獣医臨床寄生虫研究会（庶務）および『生物科学』編集委員会（副編集長）などで主体的に動く必要性があった。今年度から感染・病理学分野の分野長（大講座主任）に任命され、多くの会議と膨大な雑事をかいくぐってこなしている。しかし、WAMC運営では、きっと現4、5年生（図6）にしわ寄せが生じているはずで（彼らは、いや、彼女らは不満顔を一切見せないが）、本当にすまないと感じている。

ところで、野生動物医学の守備範囲は非常に広大であり、そのためには、日々の様々な書籍からの情報は不可



図6. 現4、5年のゼミ生たち（彼らはWAMC13、12期生に相当）と著者。（「獣医の卵たち」の公開授業にて、12月5日、本学研修館にて）

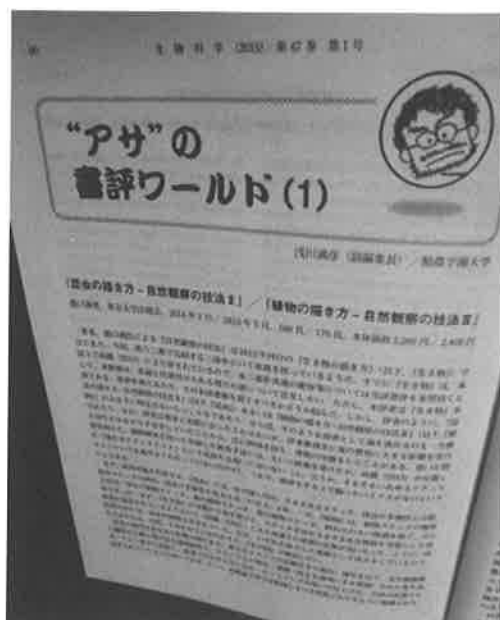


図7. 農文協刊『生物科学』第67巻1号の新コーナー「アサ」の書評ワールド」ロゴ

欠である。しかし、読み放しでは、せっかく得た知識も定着されない。そこで、野生動物医学担当となった21年前から、書評を執筆するように試みてきた。このようなことが遠因となり、『生物科学』の第67巻1号(12月刊)から、新コーナー「アサ」の書評ワールド」が設けられ(図7)、3本の書評が収載された<sup>[23-25]</sup>。この雑誌では、一般からの寄稿も受け付けているので、ぜひとも投稿をご検討頂きたい。

この他、学類職務として就職担当の責任者も兼務している。今年で3年目となり、緊急課題であった公務員獣医師問題へのテコ入れのある程度の成果もでてきた。そこで、今年は、エキゾチック・アニマル分野に力を入れることにし、11月に関係の就職開拓も行った。その報告を12月2日、本学で就職部主催の講演会「動物病院経営上の差別化戦略としてのエキゾチック・アニマル診療—宇都宮での視察から」を実施したが、夕方からの開始にも関わらず、50名を超す学群学生(一部、環境共生学類)が参集した。関心の高さがうかがい知れよう。

WAMCでは昨年同様<sup>[1]</sup>、本学附属とわの森三愛高等学校の獣医進学コース研修・プレゼミ(6月; 図8)、フィンドレー大学研修(6月)、WAMC主催「獣医の卵たち」による公開講座(哺乳類・爬虫類編; 前期毎週月曜)、小中学生対象の科研費還元事業「ひらめき☆ときめきサイエンス」(8月; 図9)、野生動物医学会主催WAMC/SSC<sup>[29]</sup>(9月)、本学EXセンター主催「獣医の卵たち」による公開講座(鳥類・爬虫類編; 12月)などを実施した。プレゼミでは感染・病理学分野長の役割



図8. とわの森三愛高校獣医進学コースにおける野生動物医学入門プレゼミの一コマ。同高校近くで有害捕獲されたアライグマに見入る生徒たち(2015年6月9日)



図9. 小中学生対象の野生動物医学入門研修(本学研究支援課主催科研費還元事業「ひらめき☆ときめきサイエンス」)

として、「獣医学の研究」という内容の授業も担当したので、野生動物医学についても補足した。また、12月の「獣医の卵たち」講座も、今回、新たに爬虫類が追加した。この担当は、タイにおける国際展開事業(後述)の交換留学から帰国したばかりの5年の城戸さんであった。

新規事業としては、国際展開事業(東京大学、北海道大学および本学主催)によるタイ・カセサート大学研修(9月と11月; 図10)のほか、本学獣医学類国際交流委員会が受け入れたタイ・コンケン大学および獣医疫学研究室(蒔田浩平 准教授)に滞在中のバンガラディシユ大学の学生たちへの研修(3月; 図11、野生動物リハビリテーター協会交流事業、5月; WRA通信31号にて掲載)および同協会初級認定講座(6月)、本学広報課主催中学生対象講座(10月と12月)などを実施した。



図10. 国際展開事業によるタイ・カセサート大学学生の学内林地調査とそこに生息していた野ネズミ類の観察（9月）



図11. 本学獣医学類交際交流委員会主催タイ・コンケンおよびバングラディシュ大学学生への鳥類医学の研修（3月2日、WAMC入院・サンプリング室；左）。コンケン大学からの学生の一人（ギーさん）とは、偶然、ミャンマーで開催されたアジア野生動物医学会大会で再会（10月；右）

## おわりに

2013年からの文部科学省私立大学戦略的研究拠点形成支援事業『生産動物の感染症病原体と感染因子の解析、その効果的な防御対策』（プロジェクトリーダー 横田博教授）における野生動物医学分野で、WAMCは「特用家畜等を含む生産動物の感染症・寄生虫病防御対策とその基盤となる網羅的な病原体の把握」の研究拠点となっている。このおもな業務内容は特用家畜等を含む生産動物の感染症・寄生虫病の防御対策のため、その基盤となる野生動物やエキゾあるいは園館など非典型的な飼育動物を対象にした網羅的な病原体把握の疫学調査や症例研究を行うことである。本事業では他班員が家畜に特化した研究を展開している。しかし、一つの健康One Healthの考えに準ずれば、このような非典型動物をも対象にしなければならない。たとえば、昨年の報告<sup>[1]</sup>でも紹介したが、WAMCで行われたニホンジカにおける肝蛭症侵淫状況の把握は、放牧牛の健康管理上、不可欠な情報となる。また、米国専門書で紹介された野鳥感染症・寄生虫症一覧は、唯一無二のもので、保全生態学

者にとって、参照すべき資料となった。さらに、動物園動物における多様な症例報告（各種蠕虫症）や疫学調査（日本脳炎など）は、生産動物の多様化を模索する上で有益な基礎情報となるであろう。

今後も同様な知見の蓄積が図られるはずだし、最終的には、家畜限定で進められたものに比較し、より効果的な防御対策の枠組み構築提示がなされるであろう。すなわち、WAMCに与えられた課題を遂行することはOne Health実践の始点なのである。特に、本報告は3期目の戦略事業中間報告も兼ねているので、今後のWAMCの方向性を示す上の敷石となれば幸いである。

## 引用文献

- [1] 浅川満彦：2014年における酪農学園大学野生動物医学センターWAMCの活動報告、北獣会誌、59、53-58、104-107、142-147（2015）
- [2] 浅川満彦：書評『オホツクの生態系とその保全』、生物科学、66、121-122（2015）
- [3] 浅川満彦：書評『動物の環境と内的世界』、生物科学、66、124（2015）

- [4] 浅川満彦：書評『文化系統学への招待』、生物科学、66、123 (2015)
- [5] 浅川満彦：書評『見えない脅威 “国内外来魚”』、生物科学、66、246 (2015)
- [6] 浅川満彦：書評『ネコの動物学』、生物科学、66、249 (2015)
- [7] 浅川満彦：書評『博物学の時間』、生物科学、66、247 (2015)
- [8] 浅川満彦：書評『日本の自然環境政策』、生物科学、66、251 (2015)
- [9] 浅川満彦：生物多様性問題の世界を生き抜くための教養動物学、第64回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会研究集録、35-38 (2015)
- [10] 浅川満彦：書評『鉄といのちの物語』、生物科学、66、250 (2015)
- [11] 浅川満彦：書評『なぜ理系に進む女性は少ないのか？ トップ研究者による15の論争』、生物科学、66、244 (2015)
- [12] 浅川満彦：書評『日本産哺乳動物毛図鑑－走査電子顕微鏡で見る毛の形態』、生物科学、66、248 (2015)
- [13] 浅川満彦：北海道産タイリクヤチネズミの毛細頭線虫類 *Aonchotheca murissylvatici*、酪農大紀要（自然科学）、39、127-129 (2015)
- [14] 浅川満彦：書評『昆虫生態学』、生物科学、66、252 (2015)
- [15] 浅川満彦：書評『40年後の「偶然と必然」モノーが描いた生命・進化・人類の未来』、生物科学、66、190 (2015)
- [16] 浅川満彦：野帳考、酪農学園大学野生動物生態研究会2014年度年間報告書、33、4-5 (2015)
- [17] 浅川満彦：ホッキョクグマー生態と行動の完全ガイド、獣畜新報、68、40 (2015)
- [18] 浅川満彦：野生動物医学センターにおける傷病野生鳥獣救護活動－今後に向けてのお願い、麦の会通信、(8)、2-3 (2015)
- [19] 浅川満彦：食品流通過程で果たして野ネズミが紛れ込むのか、第14回「野生生物と交通」研究発表会講演論文集、5-8 (2015)
- [20] 浅川満彦：書評『ミクロの森』、生物科学、66、191 (2015)
- [21] 浅川満彦：書評『アジアの生物資源環境学－持続可能な社会をめざして』、生物科学、66、245 (2015)
- [22] 浅川満彦：書籍紹介『イチョウウー奇跡の2億年史』、野生動物医学会ニュースレター、40、18-19 (2015)
- [23] 浅川満彦：書評『昆虫の描き方－自然観察の技法Ⅱ/植物の描き方－自然観察の技法Ⅲ』、生物科学、67、60-61 (2015)
- [24] 浅川満彦：書評『野生動物管理システム』、生物科学、67、62-63 (2015)
- [25] 浅川満彦：書評『農学入門－食料・生命・環境科学の魅力』、生物科学、67、61-62 (2015)
- [26] 浅川満彦（編集）：酪農学園大学エクステンションセンター、第21回日本野生動物医学会講演要旨集、119 (2015)
- [27] 浅川満彦：第21回日本野生動物医学会大会（江別大会）開催報告、ズー・アンド・ワイルドライフニュース（日本野生動物医学会）、41、1-4 (2015)
- [28] 浅川満彦：日本野生動物医学会江別大会の一般講演で発表された研究概要、獣畜新報、68、863-865 (2015)
- [29] 浅川満彦：2015年度酪農学園大学SSC実施報告、ズー・アンド・ワイルドライフニュース（日本野生動物医学会）、41、9-13 (2015)
- [30] Dewi K, Hasegawa H, Fitriana YS, Asakawa M: *Syphacia (Syphacia) maxomyos* sp. n. (Nematoda: Oxyuridae) from *Maxomys* spp. (Rodentia: Muridae) from Sulawesi and Sumatra, Indonesia. J Vet Med Sci, 77, 1217-1222 (2015)
- [31] 古瀬歩美、牛山喜偉、平山琢朗、吉野智生、浅川満彦：酪農学園大学野生動物医学センターWAMCにおける傷病鳥獣救護の2011年度以降の記録、北獣会誌、59、184-187 (2015)
- [32] 橋本千尋、山本達也、斉藤恵理子、吉野智生、外平友佳理、川上茂久、浅川満彦：サファリパークで飼育されたネコ科動物の糞便を用いた寄生虫保有状況調査、野生動物医誌、20、47-49 (2015)
- [33] 亀山祐一、佐藤理恵、浅川満彦、伊東拓也、沖本康平、下井 岳、橋詰良一：オオアシトガリネズミ *Sorex unguiculatus* の寄生虫相、東農大集報、60、10-17 (2015)
- [34] 垣内京香、浅川満彦：書籍紹介『リス・ネズミハンドブック』、ズー・アンド・ワイルドライフニュース（日本野生動物医学会）、41、31-32 (2015)
- [35] 金谷麻里杏、浅川満彦：書籍紹介『人間動物関係論－多様な生命が共生する社会へ』、ズー・アンド・ワイルドライフニュース（日本野生動物医学会）、41、30-31 (2015)
- [36] 近藤達成、浅川満彦：展示・愛玩用クモ・昆虫類

- の寄生虫症、北獣会誌、59、269-271 (2015)
- [37] 齊藤美加、荒木良太、鳥居春己、浅川満彦：紀伊半島大台ヶ原のニホンジカ *Cervus nippon* の日本脳炎ウイルス抗体保有状況、野生動物医誌、20、41-45 (2015)
- [38] 高野結衣、浅川満彦：Muzaffar and Jones 論文で扱われたウミスズメ科の病原体（解説）、酪農大紀要（自然科学）、40、印刷中 (2016)
- [39] 竹内萌香、水主川剛賢、岡本 実、大沼 学、浅川満彦：浄水場でのイワツバメ大量死とその病理学および寄生虫学的検査の記録、鳥臨研報、18、印刷中 (2015)
- [40] 高木佑基、浅川満彦：舌形動物および舌虫症に関する最近の知見—特に酪農学園大学野生動物医学センター WAMC で扱われた事例を中心に、酪農大紀要（自然科学）、40、11-16 (2015)
- [41] 高木佑基、高江洲昇、本田直也、浅川満彦：動物園展示爬虫類における蠕虫類保有状況の調査、J-VET (7)、77-84 (2015)
- [42] 田中祥菜、伊藤このみ、伊東隆臣、浅川満彦：飼育ラッコの肺に濃厚寄生が認められたアザラシハイダニ *Halarachne halichoeri* (ハイダニ科 Halarachnidae)、獣畜新報、68、47-50 (2015)
- [43] 田中祥菜、城戸美紅、伊東隆臣、浅川満彦：水族館展示用ジンバイザメ *Rhincodon typus* の斃死体上から得られたウオジラミ類、獣畜新報、68、767-770 (2015)
- [44] 田中祥菜、菅原 陽、浅川満彦：北海道産 *Elaphe* 属ヘビ類で初めて見出されたダニ類 *Ophidilaelaps* sp. (Laelaptidae 科) の記録、酪農大紀要（自然科学）、39、131-133 (2015)
- [45] 吉田圭太、浅川満彦：書籍紹介『大人のための動物園ガイド』、ズー・アンド・ワイルドライフニュース（日本野生動物医学会）、41、29-30 (2015)
- [46] 吉野智生、飯間裕子、齊藤慶輔、渡邊有希子、松本文雄、浅川満彦：鶴居村温根内で回収されたタンチョウ幼鳥の剖検記録と胃内容物、獣畜新報、68、591-596 (2015)
- [47] 吉野智生、黒沢信道、浅川満彦：アカエリカイツブリ *Podiceps grisegena* から得られた円葉類条虫、酪農大紀要（自然科学）、40、7-9 (2015)
- [48] Yoshino T, Uemura J, Uematsu K, Tsuchida S, Osa Y, Taniyama H, Endoh D, Asakawa M: Post-mortem and helminthological examination of seabirds killed by oil spill at Ishikari, Hokkaido, Japan, in November 2004. Res One Health, 2, 1-16 (2015)